
死神のヘルノス

子猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神のヘルノス

【Nコード】

N1347F

【作者名】

子猫

【あらすじ】

俺は人と違った物の考え方を持っている。だから誰も俺を理解してはくれない。誰か俺を理解してくれないのか……。そんな俺の生活はあるときをきっかけに変わってしまった。

第一章：召喚

俺が普通の人とはかなり違ったものの考え方をしていると思い始めたのは小学校のころからだった。

俺が小学校5年生のとき道徳の時間に先生が、

「道を歩いているときに困っている人を見つけたらどうしてあげるのが良いかみんなで考えましょう。」と言った。

みんなが自分のプリントを見ながらじっと考えている間、俺はずっと窓際の席で外を眺めていた。ペンは置いたままだ。本当にどうしてこんな退屈な授業をするのだろう。よくこんな無駄なことにみんなは一生懸命になれるものだな。ぼーっとしている俺に先生が呼びかけた。

「隼人君、ちゃんと考えてるのかな？」と先生は俺に言った。俺は無言のまま頷いた。何人かが俺のことを見ていた。つたく、いちいち反応するなよ。居心地が悪いじゃないか。しばらく時間が経ってから先生がまた話し始める。

「それじゃ！そろそろみんな考えられたと思うので発表してもらいたいと思います。じゃあまずは隼人君。」

俺は下を向いたまま言った。

「僕、何もしません。」

言ったとたんにひそひそ話す声や笑っている声が聞こえた。このままだと変な疑いがかかるところだと思ったからそのまま続けた。

「だってその人のことをもし助けてあげたら自分のことなんかほっとしてくれ、とか思うかもしれないじゃないですか。もしそういう人だったら助けられない方がいいと思います。それに僕だってもしそんなことをされたら自分でできるのについて思います。余計なお世話だと思います。」

すると教室内は静かになってしまった。その後、俺は先生に職員室に呼ばれて説教をされた挙句に放課後一人で掃除をさせられた。

これが俺の人を困らせるような意見だった。でも、こんなことをいうのも小学校までで中学校にいったらさすがに大勢の前でこんなことをいうのはやめ、自分の中だけにとどめて置くようにした。また居残りをさせられたり他人から変な目で見られるのも嫌だったから。

それでも、誰かにいいたい、自分の意見を直に伝えたい、と思うときはひたすらノートに自分のいいたいことを書きまくった。でも、そのノートも誰かに見せるわけでもなくて誰にも見つからないように鍵のかかる引き出しの中にしまっている。これが俺の宝物だ。

中学校ではクラスの仕事をよくやるようになり、先生にほめられることが多くなった。そして学級委員長として仕事をするようになり、周りから頼られるようになった。人と話すことも多くなり、疲れる日も増えた。だんだんと人とも話したくなくなつて、親と話をするのがほとんどなくなつてしまった。

部活動もやり始めた。小学校のころから足が速かつたので陸上部にはいった。種目は100mで、1年であるのにもかかわらず地区大会に出場してなんと優勝してしまった。優勝したときは言葉では言い表せないほど嬉しかった。誰にもこの幸せを取られたくないと思った。先生や先輩からも期待のできる一年のエースだと褒められ、嬉しかったとともに不安にもなった。もしも大会でいい結果が出せなくなつてみんなを失望させたらどうしよう・・・

中学校生活は辛い。小学校のころとは違い、勉強にも気をつかわなければならぬ。塾にも通うようになった。

勉強、部活、クラスの仕事、勉強、部活、クラスの仕事・・・部活もだんだんつまらなくなり、手を抜くようになった。クラスの仕事も人と話すことも面倒くさくなった。勉強も何もかも投げ出してしまいたい、全部終わつたしまいたい。

だが現実はそのはいかない。

毎日が同じ事、同じ事、同じ事。つまらない、つまらない、つまらないの繰り返しだ。

なんか奇跡でも起こってくれないかと思った。地震が起こってもいいからなにか今の生活が変わらないかと思った。だがそうなるわけがないと心の底ではわかっていた。それでもそうなって欲しいと思うのはそれほど毎日の繰り返しがつまらないと思ったからだ。

奇跡やありえあいことが起こるのを期待していると、アニメやマンガに出てくるような事に興味をひかれて、部活をサボって家で過ごすことが多くなった。学校から家に帰る途中にも毎日同じ通学路だとつまらないから道を変えて自転車で違う道を走った。いつもと違う風景が俺の頭の中を駆け抜けると、何か不思議なことが起こりそうな気がする。普通の人の格好をしている人でも、こいつは実は魔法使いだとか、電柱の上から何か怪物が降ってきて俺の事を襲おうとしているとか、そういうことが起きないかと思った。一度だけひたすら走りたくなって、制服を着たまま夜まで自転車をこいでいたら、家に着いたのが夜中の11時になってしまったこともあった。親に心配を掛けた所為で、その日から午後6時までが門限となってしまうた。

俺は自分が間違っているとは思わない、どうして誰もわかってくれない、誰か俺の言うことを聞いてくれる人はいないのか。そういう人が現れるのを期待していた。そんな人は現れなかった。自分が信じられるのは、いいたいことをいっぱい書いた宝物のノートだけ。家族も友達も、普段は話しているが心の底では疑っていた。

「不平等な世の中だ。本当につまらない世の中だ。こんな世界、消えてしまえばいいのに。」

そんな事を思う日も多くなってきた。

世界は消えないし、こんな事を思っても何か起こるわけでもない。でも、ただそう思うことしかできない。自分が無力に思えてならない。だから、自分以外の何かとてつもなく大きな力がこの世界を変えてはくれないかと思っていた。

ある学校からの下校中、いつものように何か起こらないかと思っていた。今日も魔法使いは現れないし、怪物が人を襲っているような摩訶不思議な光景にはお目にかかれない。自宅であるマンションの門をくぐり、階段を重い足取りで上っていった。

俺のマンションは3階建てだ。家は3階、つまり最上階なわけだ。2階から3階に上がるとき、電柱が俺の目線にちょうど映る。俺は何もしていないのにくたくたになってた。3階に着いたとき、なんだか良くは覚えてないが、俺は何も居ない電柱に向かってこんな事をいつていた。

「こんな苦しい世の中に居たくない。天使でも死神でも何でもいいからそのときがきたらその電柱で俺の事を待っていてくれ。」

そういったあと階段に座って俺は一人、ずっと下を向いていた。ぱつと顔を上げたら電柱の上には天使が現れていた・・・なんてことはないよな。結局何も起こらないまま、俺は自分の家に入っていた。

第二章：出会い

俺の朝の始まりは、かわいい小鳥のさえずりが聞こえて起きられるようなさわやかな朝ではなく、うるさい目覚まし時計と、母の怒鳴り声だ。顔を洗って着替えを済まして朝食を食べ、いつてきます、という。今日もいつも通りだ。ドアを閉めて、昨日の電柱をみた。天使は・・・そこには居なかった。

「いるわけ、ねえよな。」

思わず声に出してしまった。誰にも見られなかったけど、恥ずかしくなった。走って自転車にまたがり、全力でこいで俺は学校に到着した。

本来は遅刻であるはずだったが、今日はHRの先生が遅いらしく、ラッキーだった。俺が席に着くと、HRの終わりを告げるチャイムがなった。もうすぐ一時間目が始まる。一時間目から数学だ。朝に弱い俺は、その日の授業が簡単な方程式や関数だったとしても頭が全然働かない。数学が得意な俺だが、朝の一発が数学である日は大嫌いだった。

授業が始まって頭がボーッとしたままなので、窓際で空を眺めていた。今日はプリントで良かった。授業がプリントだと、指名されて問題を解く必要もないし、プリントを解いていなくともこの先生はプリントを回収したためしがない。本当に今日はラッキーだ。朝の出だしがいいとその日はいい日になる、というのが俺の持論だった。逆に出だしが悪いとそれは最悪な日になるものだ。これは100mでも同じ事で、スタートが肝心だ。まあ、最近はその部活もサボっているのだが。

昼休みが始まり、俺は昼飯を友達と食っていた。くだらない会話で盛り上がっているとき、ふと目を廊下にやると部長の海山先輩がこっちを見ていた。あの目は明らかに俺を呼んでいる。仕方ない、行くしかないようだ。

海山先輩の元に行く突然、胸倉をつかまれた。

「お前、いつまで部活サボってんだよ！先生からも何度も何度も話があつただろ。家にも電話したんだぞ！」

俺は黙ったまま下を向いていた。その俺の態度が気に入らなかったのか、先輩は俺を睨みつけてこういった。

「これで最後だからな。もしまた何度もサボるようだったらお前、退部しろ。」

ひどく冷たい声だった。逆上していたが、冷やかに言われた。ああ俺はもうこの人から見放されたんだ、そう思った。誰かに見放されるということはもう、その人の中に自分はいないということだ。だったら、俺は先輩にとって居てもいなくても同じ、空気みたいなもんなんだろうな。でも、今日ばかりは部活に出ないと。たとえ見放されたからといっても部活をやめて入るところなど他にないのだから。

6時間目が終わり、俺は部室に向かってあるいて行った。着替えを済ませてストレッチをして体をほぐしていると、同じ100mスプリンターの川崎が話しかけてきた。川崎は俺の小学校の時から友達だ。俺の中では一番心を開けるやつだけど、最近登下校をとにもすることも少なくなつて距離が遠くなつてしまった。

「あゝ今日は来てるんだね。やつぱ海山先輩や先生にあれだけ言われたらこなきやだよな。」川崎は同情するように言った。

「今日、昼休みにスッゲゝ海山先輩に怒られてさ。」

流石にやべえな、って思ったから今日は来たんだよ。そうしないと俺、部活やめさせられちゃうし。」

気分が暗くなってきた。最近はやから暗いのだが、先輩は本気で俺にああ言ったのだ。こんなことを思うのはおかしいかもしれないが、あれだけ自分の言いたいことを言えるというのは正直。うらやましいかもしれない。

部活は長くなってしまつて時計はもう7時をまわっている。門限は守れないが、今日は部活があることを母も知っているはずだから許してはくれるだろう。こんなに暗くなるまで外にいたのは久しぶりだな。上を見上げると空を雲が覆い始めている、10分もすれば雨が降り始めるだろう。早く帰らないと。

そして、マンションについた。昨日やり始めたばかりだけど今までの習慣のように、俺は下から電柱を見上げた。やはり何もいないようだ。重い体を引きずりながら、俺は階段を上った。すると、電柱に何か黒い影が見える。胸がトクン、トクンとなつていてるのを感じた。もう一度みて見た。

すると、電柱の上にとまつているのは・・・カラスだった。なんだよ期待はずれだ、と思つたが当たり前だと思つた。不思議も、現実離れた世界の事も考えるな、これからはちゃんと現実と向き合えと言われている気がした。これからはちゃんと向き合おう。この、つまらない毎日の繰返しと。

でも・・・でも、やっぱりそんなのは面白くない！また昨日と同じように階段に座る。顔を伏せ、バックを無造作の放り投げる。体は久しぶりの部活の所為で、とても疲れていた。もう本当に何もかもがどうでもよくなつてしまつた。こういうのが絶望つてものかな。結構・・・楽なもんだな・・・。

カー、カー！とカラスの声が聞こえる。なんだか眠くなつて来て、頭がふらふらする。

突然、声が聞こえた。

「昨日、俺様の事を呼んだのはお前だな。」

はつと意識が戻り、前を見るとそこには誰もいない。気のせいかと思ったが、あたりをきよるきよるしていると、また声が聞こえた。

「どこを探しているんだ。まったく、人間という生き物はのろまな上にとんまな奴らだな。」

今度こそはつきり聞こえた。声の主を探すと、そいつは電柱の上だった。そこには俺と同じ年かひとつ下くらいの年であろう少年が座っていた。

背筋の寒さと、魂を吸い取られるような感覚が俺を襲った。

「お前・・・お前は一体なんなんだ！」

「なんなんだだと？人間はたまにおかしな質問をしやがる。俺様は俺様だろうが。」

おかしいのはこいつの方だ。大体中学生位の年の奴がこんな時間に、しかも電柱の上に座っているなんて、有り得ない。

「お前はお前とかそういうことじゃない！お前はどこから来た何者なんだといっているんだ！」

少年は一瞬消え、再び俺の前に現れた。

「あんまし生意気な口、聞いてんじゃねえぞ。人間が。一世紀も生きてねえやつらが俺にそんな口たたくんじゃねえ。こっから突き落とすぞ。いいか、よく聞いている。お前は俺を召喚した。人間界の時刻で言うと昨日の16時39分13秒にだ。その瞬間から今まで、俺はお前を監視し続けていた。そして、これからお前のそばで監視をすることを決定した。」

そついうと死神はにやりと笑った。

カラスが激しく鳴き、雨が降り始めた。

「それから俺様は、死神だ。」

雷鳴があたりに轟いた。死神の不気味な笑いが一層奇妙に聞こえた。

第二章：出会い（後書き）

お久しぶりです。二章、お楽しみいただけましたか。感想もお待ちしております。

第三章：変化

死神は、詳しく話を聞かせてやるからお前の部屋へ案内しろと言った。まったく、なんて礼儀を知らない奴なんだ。でも俺も話を聞きたいからまずは俺の部屋に行こう。

家に入るとおかえりといってくる母に向かって、

「ただいま、今日は疲れたからもう寝るね。ご飯はいらないから。」
と言って自分の部屋にはいつて鍵を掛けた。母はドア越しから、体の具合は大丈夫？どこが悪いところはないの？と聞いてきた。俺は大丈夫だよ、とだけ言っておいた。母親というのは無駄なところでいちいちうるさい。体の具合とかは聞いてくるのだが、自分がいま悩んでいることとかにどうも鈍感だ。俺がどんなに悩んでいても肝心なところに気づいてくれない。

そんなことを思っていると死神は、

「もっと母親と話さなくていいのか」と言った。

「そんなことはどうでもいい、とりあえずお前がなぜ現れたのかということと、なんで死神であるお前がそんな少年の姿をしているのかということを教えてくれ。」聞きたいことがありすぎる。頭の中が混乱していてほとんど理解できないだろうが聞かないよりはましだ。

「そうか。貴様の無礼な態度はひとまず許すとして、話しやすいことからはじめてやろう。まず、なぜ俺様がこんな格好をしているからだ。俺様は死神界にいるときはこんな姿はしていないのだが、人間界で本当の姿を他の人間どもに見られるとまずい。だから人間界で見つけたこの少年の姿だったら怪しまれないしお前との行動もしやすいだろうと思ってこの姿にしたわけだ。」

そこで新たな疑問がうまれた。

「ちよつと待て、ということはお前は俺と一緒に生活するってことなのか。死神のお前が。」

信じられない事だったので聞いて見たのだが、

「監視するといったのだからそんなことは当然だろう。」と死神にはつまらなさそうに返されてしまった。

「そもそも監視とはなんなんだ。ただ人間についていくだけで、死神には何の徳もないだろう。」

俺がそう言うのと死神は一度姿勢を正した。きっと重要な話だからだろう。

「それが俺様がここにきた理由だ。この世・・・つまり人間と死神と神がいる世界だ。神の仕事は世界そのものの管理、死神の仕事は人間たちの監視、というように分担している。死神である俺たちは人間たちがこの世界をおかしくしないように見張っているんだ。」

「でも、それは人間全体を監視することだろう。どうして一人の人間を監視するんだ。」

「そこで死神が人間界に降りてくるわけだ。お前ら人間で死神を召喚しようと思うやつら、まあお前は無意識だから別だとして、そういうやつらは大抵この世の中は間違っているから世界を変えようだとか思うやつらか、ただ欲望に溺れている哀れなやつらだから、どちらもとりのあえず重要人物として死神がつくんだ。そこでその人間が人間界を正してくれるやつか、それともただ人間界を狂わせたいやつなのか、死神が見極める。その判断が決まるまでの期間を監視と俺たち死神は呼んでいる。」

死神が話し終えるとしばらく黙り始めた。きっと俺に考えをまとめる時間をくれているのだろう。それにしてもなんだか複雑な話だなこの世の中がそんなふうにできていたなんて。人間はそんなことも知らずに生きているのか。

さっき言っていた死神が選んだという少年の姿を俺はよく観察してみた。少年の髪は茶髪で、年に似合わないだぶだぶの服を着てる。そのうえ、アクセサリーやらなんやらをジャラジャラつけている。慎重は俺より少し小さいくらいで160cmとちょっとあるくらい

だ。

「お前が選んだか・・・あまり死神のイメージにはあわないな。」

「当たり前だろう、周りに死神だといっているような姿をしている意味がない。」そのまま死神は話し続ける。きつと俺の質問になど興味がないのだろう。

「次に、なぜ俺様が現れたかだ。人間界に死神が訪れるには人間が死神を召喚する必要がある。だがそれには一定の条件と召喚する人間の知性がそろっていないればできない。だがそれをお前はやった。しかも自分がやったという自覚がないということは異例なことだ。昨日のことを思い出してみろ。」

俺は昨日の帰宅中、階段で自分が言ったことを思い出した。たしかに死神に現れて欲しいというようなことをいつていた気がする。

「思い出しただろう。そのときから俺は人間界に召喚され、お前を監視することになった。現在、人間界にいる死神は俺様だけだ。昔は死神が人間界に召喚されるなんてことはしょっちゅうあったのだ。最近では死神の存在を信じるやつも少なく、召喚をする術を知っているやつなんていないからな。最後に死神が召喚されたのは1500年以上も前の話だろう。」

死神は術といったが、俺が昨日言ったのはただの独り言でなにかの呪文でもなんでもないはずだ。一体なんでそれが死神を呼ぶ様なことになったのだろう。でも、今はもつと別に聞きたい事がある。

「死神は人間の魂を取ったりするというじゃないか。それに俺と生活するといつても母さんたちに見られたらどうするっていうんだ。」

「その点に関しては心配は要らない。俺様は母が入院中のお前の従兄弟ということでここに住み、お前と同じ学校に通うという設定になっている。それから、死神が人間の魂をとるというのは本当だが、それは死神がついた人間が死ぬときだけだ。他の人間の魂はとうろくと思えばいつでも取れるのだから。」といって死神は少し笑っていた。

頭の中がさらに混乱してきた。今までこいつが言ってきたことが本

当なのだとすれば、今日から俺はこの死神と一緒に住み、生活をと
もにし、同じ学校に通うということになってしまふ。それに、俺の
従兄弟は二年前に事故で死んでいる。姿も形もまったく違うし、こ
んなことがあっていいのだろうか。でもこいつは死神なんだ。今ま
ですつと期待してきたはずの「有り得ないこと」が一気に俺に流れ
込んできて、わけが分からなくなった。とりあえずはこの死神にそ
の疑問をすべてぶつけてみよう。

「分からないことが多すぎる。一つ一つ答えてくれ。」と俺は死神
に言ったのだが、

「それは少し待ってくれ。もうすぐ俺様がこの家にやってくる時間
だから。」と死神はわけのわからないことをいうと、姿を消した。

それから10分くらい経つただろうか。さっきまで話していた死
神との会話の内容が頭の中をぐるぐるしながら、さっきまで起きて
いたことが果たして本当にあったことなのだろうか、部活と勉強の
疲れのせいで頭がおかしくなっただけではないだろうかと思ってい
た。すると、突然家のチャイムが鳴り、俺は飛び上がって玄関に急
ぎ足で向かった。母も一緒に出てきてドアを開けるとそこにはさっ
きまで俺の部屋にいた死神がトランクを持って立っていた。

「こんばんはお久しぶりですね、伯母さん、それから隼人君も。」
死神が話している間、俺はその姿を見ながらただ呆然と立っていた。
死神を見た母は、

「あらゝいらつしやい晶君。待っていたのよ。これからよろしくね。
お父さんが今転勤しているから、お父さんの部屋を使って頂戴ね。
ほら、隼人も早く挨拶しなさいって。」立ち尽くしたまま何もいわ
ない俺の背中を母は押した。

「ああ、こんばんは。」俺は半ばわけがわからなくなっていたが、
取り敢えず挨拶をしておいた。

そして死神を部屋に案内し、荷物を置かせてからまた俺の部屋に死神をつれて戻った。床に座ると死神は口を開いた。

「そういうわけで、俺様はこれからここに住むことになった。それじゃお前の質問に答えてやろう。」

知りたいことがさらに増えて、どれから聞けばいいのか分からなくなってきた。

「とりあえず・・・なぜお前が死んだはずの従兄弟のかわりになっているのか聞きたいんだけど。」

「死んだやつの代わりに死神がなるといのは人間界に来る死神にとっては基本だ。お前の従兄弟が二年前に死んでいるというのは調査済みだし、親族のほうと一緒に住みやすいだろう。」と言うと、死神は眠たそうな顔をした。そういえばもうすぐ夜中の12時だ。というより死神も眠るのか。

「もう遅いから今日は眠ろう。明日は土曜日だから学校は休みだぞ。部活もないみたいだし。」

これで、明日もいつから話を聞ける。死神はニヤリとして言った。「そうだな。明日は人間界を久しぶりにまわってみるか。死神界からたまに見ていたのだが、人間の技術の進歩はたいしたものだな。1600年ぶりの人間界か。しかもこの国に来るのは初めてだな。この国は外国の文化が伝わるのが遅かったせいで死神が訪れるということがほとんどなかったんだ。明日はお前の世界についても話してくれ。」

死神は父さんの部屋に戻っていった。俺は疲れがたまっていたのですぐに眠ってしまった。明日からは死神との生活か。

第四章：友情

土曜日。昨夜の雨も止み、朝露が葉を濡らしている日差しは穏やかな朝。休日というものはいいもんだ。平日にあるようなやかましい目覚ましや怒鳴り声も、この日ばかりはない。目が覚めたがまだ起きる気になれず、うつうつとしていた。昨日は何時に寝たっけ？ なんだかよく覚えて居ないな・・・まあどうでもいいか・・・。

「起きなくていいのか。」

誰かの声が聞こえる。誰だろう・・・父さんかな。

「お前の母親に起こすよう言われてきた。早くしないとお前の魂を持ってくぞ。」

【魂】という言葉聞いてはつと起き上がった。そうか、この声は死神か。

「ようやく起きたか。人間の体は不便だな睡眠や栄養をとらないといけない。俺様もいまは人間の体にいるからそればかりはしないとイケないんだ。だからさっさと着替えて飯を食うぞ。」

そういつて死神は部屋を出て行った。死神に起こされるようになるなんて誰が考えたことだろう？ 貴重な経験・・・といていいのだろうか。どちらにしてもあいつに起こされるのはあまり気分のいいことではない。せつかくの休日だからもつと寝ていたいのだが、そろそろ起きておかないと朝食が抜きになってしまいかもしれないのでさっさと起きて支度をしよう。

食卓について椅子に座り、パンを食べる。土曜の朝はいつもこれだ。普段と違うところはいつもはいる父さんの席に死神が座っていると言うことだ。どうやらパンの食べ方は知っているらしい。だがこいつはジャムやバターを知らないらしく、何もつけずに食べている。

「晶君、目玉焼きもあるけど食べないの？」と母さんが言った。

「はい、いただきます。」と死神は笑顔で答えた。やはり他の人間といるときは言葉遣いがちゃんとしているみたいだ。だがこいつは目玉焼きを手で食べようとしている。俺はジェスチャーで箸を使って食べるように呼びかけた。・・・そうか、こいつは日本が初めてだから箸の使い方がわからないんだな。一生懸命に箸を使おうとしている死神を見て、なんだかおかしくなってきた。死神は日本は外国の文化が入ってくるのが遅かったと言っていた。じゃあ日本の文化も知らなくても当然か。

食事中に母さんが俺たちに言った。

「あなたたち今日はせっかく休日なんだからどこか出かけてきなさいよ。晶君もこの町を見てみたいわよね。」

それは既に計画していた。昨日の夜に死神に今日は町を案内するようにならなければならないうちに帰ってくるから。」

「買った。遅くならないうちに帰ってくるから。」
「買い物もちゃんと行って来るのよ。」母さんはそう念を押して部屋の掃除を始めた。

「はいはい。」俺はテキストに返事をしておいた。
朝食も食べ終わったしそろそろ行くでしょう。」

秋風が町に吹き、落ち葉を飛ばしている。もう10月の終わりになる。行く場所を特には決めていかなかったので、適当に町を散策することにした。自分で言うのもなんだが、計画をしたという割りに行く場所を決めていないというのは無計画だと思った。それが死神に気づかれたくはなかったから、行く場所をちゃんと決めているかのように見せかけた。死神は自分からしゃべろうとしないので楽だ。服装は昨日あったときと同じような格好をしていてアクセサリをまたジャラジャラとつけている。町を歩いていると、アクセサリー店のようなものがあつたので、死神に話しかけてみた。

「死神、お前はあんなものに興味があるんだよね。」

すると、死神は意外にも不機嫌そうな顔をして言った。

「俺様はあんななんの意味のないものに興味はない。お前はたぶん俺様の服装を見てそういつているのだろうが、俺様のアクセサリーは普通のものとは違う。ちゃんと魔力を持っていて、人間に自分の姿がばれないようにくらしの呪文が掛けられていたり、危険から身を守るための保護の呪文を掛けたりしているんだ。あんなものと一緒にされては困る。それから【死神】という呼び方はいい加減やめろ。」

そうかそれでこんなに不機嫌そうなのか、でもこいつの名前は知らないしなと呼べばいいかわからなかったので聞いた。

「じゃあなんて呼べば良いんだよ。」

「晶と呼べばいいんだろう。今はお前の従兄弟なのだから。」

晶か。本当はそう呼べばいいのかもしれない。だけど俺はとにかくその名前が使いたくはなかった。死んだ従兄弟の名前を、俺に召喚されたからと言う理由で勝手に使っている、この死神をその名前で呼ぶのが嫌だった。ただそれだけの理由のはずなのに、怒りがふつふつとわき起こり、つい声が少し大きくなってしまふ。

「晶と呼べだと・・・俺にとっての上原晶はもう死んでいるんだぞ！お前をその名前で呼べるかよ！」

そう、上原晶は死んだ。二年前に事故で死んでいるんだ。それなのに・・・今更呼べるわけがないだろう・・・。

死神はそれを聞いたとたんにさびしそうになった。

予想もしていなかった死神の表情に俺は戸惑ってしまった。

「すまなかった・・・そうか、人間はそこまで死んだ者のことを思うのか・・・。俺様は・・・そんなことは考えもしなかった。そういうことを考える習慣が死神にはないからな。」

なんて死神が言い出すから、俺はどうしたらよいか分からずにただ目をそらすようにした。死神も人間と同じような考えができるんだな。俺もきつく言い過ぎたかな。こいつも死神だしまだ人間のこと良くわからないのかもしれない。別の世界に住んでいる奴にいき

なりこんな言うのもひどかったかな。

「そんなにきつく言うつもりはなかったんだ。ただ、あんまり逝ってしまった人の名前を使うのはちょっと抵抗があつて……。でもそういうことになってしまったんだからそう呼ぶしかないよな。」

すると死神は少しあわてたようでこう付け加えた。

「そんな必要はない。俺様の死神界での呼び名を教える。本当はあまり言いたくなかったが、どちらにしてもいずれ教えることになるだろうからな。今教えてしまおう。」

そう言つて死神は静かに深呼吸をしてから言つた。

「俺の名前は【ヘルノス】だ。先祖は眠りの神【ヒュプノス】。」「
そういうと死神はだまつてしまった。こいつは今、いったい何を考
えているのだろう。俺も話しかけられないから黙っていた。【ヘル
ノス】か、一体どんな意味なんだろう。それに先祖つて言つてたけ
ど【ヒュプノス】とかいうのも気になる……。」

しばらくしてから俺はヘルノスに話しかけた。

「死神にとつての名前は重要なものみたいだな。普段はその名で呼
ぶけど学校では上原晶で呼ぶことにするよ。」そういうとヘルノス
もやつと話してくれた。

「そうだな……。それがいいな。それじゃ、町の案内を続けてくれ。」

また、いつもの死神の傲慢な態度が戻っている。でもこの気分の転
換の仕方がどこか人間らしい気もするな。こうしていると本当にた
だの中学生みたいだ。

町を歩いていると突然ヘルノスが文献はあるか、と言つた。俺は
すぐに町の図書館に案内した。図書館の中は少し暖かくなっている。
まだ十月の終わりだけど外はもう冬を迎える準備をしているかのよ
うに寒くなつてきている。図書館に入ったとたんに、何かを探すよ

うにヘルノスはあちこちをまわり、やっと神話が並ぶ所で止まった。ヘルノスはそこで2時間以上も本を読み続けてその間、一切口を開こうとしなかった。そして本を閉じると、いきなり俺に話しかけた。「まったく、人間が書いた神話は嘘ばかりだな。神々の名前まで間違っている。」そういうと再び本を開き、俺に突き付けてまた話し始めた。

「ここだ。さっき話した俺の先祖の【ヒュプノス】のことが書かれている。眠りの神で、人間に対して憐れみを持ち、優しい神だった。しかし、【ヒュプノス】が与える死は鉄のような心を持っている。神格は【死】ではなく【眠り】なのだが、ギリシャ人にとっての眠りは優しい死のことだから【ヒュプノス】も死の神だったといわれている。普段は優しい方なのだが、人間が悪さをしようとするときを容赦をしない。死神の代表のような存在だったのだ。」

自分の先祖について話すとヘルノスはまた町を案内するように俺に言った。全く、なんてジコチュウな奴なんだ。

腹が減ってきたので近くにあったファミリーストランで食事をした。俺はヘルノスに箸の使いかたを教えることにした。ヘルノスは覚えるのが早い。すぐに箸を使えるようになった。フォークやナイフも使えるようになり、やはり人間とは違うなということを感じた。前に死ヘルノスが人間界に来た時はみんな手でものを食べていたらしい。だからそういう道具の使い方がわからなかったのだそうだ。

食い歩いたり喋ったりしていたらそろそろ帰らないといけない時間になったので買い物をして帰ることにした。買い物リストにあるものをかごに入れているとヘルノスが居なくなっている。どこに居るのかと慌てて探すと、店のお菓子を勝手に食べている。こいつは何やってるんだ……。人間界に来るのならもう少し常識をもっておけよ……。俺は小声で言った。

「ヘルノス、店のものを勝手に食べたらだめなんだよ！それをどうにか隠しておけ！」

ヘルノスは頷いてお菓子のごみを消した。死神にとってそんなことをするのはたやすいようだ。だがこれ以上やられると困るのでお菓子を買ってやることにした。カメラに映ったりとかしていないといいのだけど・・・。

スーパーでの衝撃的な出来事後、家に帰る途中にヘルノスが俺に話しかけてきた。

「人間界の菓子も昔より断然にうまくなっているな。前に俺様が来た時なんて、菓子と呼べるものはほとんど無かったから人間界で生活するのも楽しみになって来たぞ。」そういつてヘルノスは嬉しそうに笑った。頼むからもうあんなことはしないでほしいよな・・・。これでは本当に死神かどうかすらわからなくなってくる。何も知らないただのガキのようだった。

そんなくだらない会話をしていると後ろから自転車のベルを鳴らしながら走ってくる奴が居た。

「イケ～～！！池上～～！！池上隼人～～！！」

この声は川崎だな。川崎は俺に追いつくと息を切らしながら話しかけてきた。

「やっと追いついた・・・。あれ？隣に居るのはどちら様??」

俺に話しかけて隣にいるヘルノスを指さす。

「ああ、こいつは俺の従兄弟で上原晶つて言うんだ。こいつの母親が今入院しているから、俺ン家に住むことになってて、来週から俺たちの中学校に来るんだよ。」そういうと川崎もわかったようで、ヘルノスに挨拶をした。

「俺は川崎駿つて言うんだ。隼人とは小学校から友達で同じ陸上部に入っているんだ。ってもこいつとくらべて俺なんかスプリンターとしては全然なだけだね！」そういつて川崎は笑った。ヘルノスも挨拶を返した。

「僕は上原晶といいます。これからよろしくお願いしますね。」
そんなヘルノスの硬い挨拶の所為に、川崎はちよつと動揺した。そして、俺のに向かって囁いてきた。

「この子本当に隼人の従兄弟なの？隼人と全然タイプが違うみたいだけど・・・」川崎がそういうので俺がフォローをいれた。

「こいつ、他人とは昔からあんま喋らない所為でこんな喋り方なんだよ。でも悪いやつではないから仲良くしてやってくれよな。」

そついうと川崎は納得したようで、二人と別れるために言った。

「そうなんだ」。あ、俺はこれから塾があるからここでね！じゃあまた学校で！」

川崎がいなくなるとヘルノスが俺に話しかけた。

「友達つてやつか。良いやつみたいだな。結構仲がいいじゃないか。」

「そりや仲いいよ。だって川崎とは小学校の頃から友達だからさ。

死神にも友達とかはいるのか。」

そついうとヘルノスはしばらく考えてからこう話し始めた。

「友達か・・・。仕事仲間で話すやつはいるな。でも契りを結ぶほどのやつはいない。」

【契り】？いったい何のことだろう。するとヘルノスも気づいたようで説明してくれた。

「お互いに信頼しあうもの同士の間では【契り】が結ばれるんだ。

【契り】が結ばれると相手が危険なときや死が近くなったときは必ずそいつのそばに自分がいる。また、【契り】によって魂のつながりもできる。つながりができた魂は死後の世界に行ってもそのつながりは保ち続けるんだ。【契り】は人間同士や死神同士、物とも結ぶことができる。だがなぜか人間と死神同士ではつながることができないんだ。」

【契り】か。俺にもそんなものを結べるやつが現れるだろうか。それより物とも結べるというのはよく分からないな。まあその人にと

つてとても大切なものなのだろう。俺の宝物のノートもそうなのかな。

「それじゃあ、逆に嫌いなやつはいないのか？」

「それは勿論いる。一緒に居たくないやつだな。でも俺様が思うにそういつた嫌なやつらだからこそいいところを見つけてやるべきだと思っんだ。お前はそうは思わないか。」

突然そんなことを聞かれるから俺は何も言えなくなってしまった。

俺の学校にも嫌なやつらがたくさんいる。人をいじめたり、学校で悪さばかりしているやつらが太勢いる。そんなやつらにもいいところがあるのだろうか。俺は、そいつらのいいところを見つけられるのだろうか。

俺は気づいた。

そっか。それが優しい人なんだな・・・

嫌いなやつらでも少しのいいところを見つけれれる、そうしてそいつを認められる、好きになれる。そういう人が優しい人なんだな・・・

家に着いてからその日はヘルノスと話をしなかった。今日聞いた【契り】のことや優しさについてとかいろいろ考えると考えることがあり過ぎたんだ。考えることが前より増えた。でも考える内容は前とはぜんぜん違う。毎日が退屈でつまらないと思っていたけど、毎日いろいろ考えている。これが成長するってことなのかな。

日曜日はヘルノスが部屋から出たがらなかった。監視つてそんなに重要な仕事じゃないのかもか思ってしまう。ヘルノスはお菓子を食べながら部屋でごろごろしている。これじゃあ太っちまうぞ。

今は人間の体だということを忘れてるんじゃないか？

俺は一人で部屋でマンガを読んだりしながらこれからのことを思った。

死神との学校生活。明日からとうとう始まってしまふ。でも、今日いろいろあつて、きつとヘルノスとはうまくできるだろうと思う。

わがままでジコチュウで勝手な行動ばかりしているけれど、時々見せる人間らしい行動から、本当はいいやつなのだと思える。

これから起こることが悪くならないように願い、俺は眠った。

第五章：学校

俺はいつもの道を走っている。コンクリートの道を自転車で駆け抜けて、公園の中を突っ切っていく。道を曲がってまっすぐ走ると俺の通っている学校が見える。校門を抜けて自転車を止める。自転車置き場には俺を待っていた川崎と・・・死神がいた。

ヘルノスと学校に行くのは初めてだからなんだか変な感じがした。ヘルノスを見るといつもは着けているアクセサリーが見当たらない。こいつ茶髪だから先輩たちに絡まれたりしないか心配だな。

「おはよう！隼人！」と川崎が元気に声を掛けてきてくれた。本当にこいつと一緒にいると元気にさせられる。朝にこいつの声を聞けないとずっと暗いままになってしまふ。時間が迫っているので二人に言った。

「またせちまつて悪いな。もうすぐHRが始まる。早く教室に行こうか。ヘル・・・晶はクラスはどこになったんだ？」

死神の名前を言いかけて危なかったと思ったが川崎は気づかなかったようだ。でもたぶん気づかれてもあだ名かなんかだと思うだろうとあとで思った。【ヘルノス】なんてあだ名を付けられる奴はいないだろうけど。

「俺は職員室に寄っていかないといけないから二人は先に行つて！」とヘルノスは俺たちに言った。日曜日の日にヘルノスに他の人との話し方をどうにかしろと散々言ったから、こいつも前のような堅苦しい挨拶はしなくなったようだ。これで他の人も困惑するようなことはないだろう。

「じゃあ行こうか駿。」と俺は川崎に話しかける。

「うん、早く行こうぜ！さもないと先生にまた怒鳴られちまうよ。」と川崎は笑いながら言う。本当にこいつは毎日元気な奴だな。こいつからエネルギーをもらって生きているような気がする。そういう奴はこいつ以外にいない。川崎は俺にとって特別な人なんだな。き

つと。

HRが始まった。ヘルノスは俺たちのクラスになったようだ。たぶまた俺の監視をしやすいようにとかそういう理由だろうな。ヘルノスが自己紹介をしている。

「上原晶です。新潟から引越して来ました。この町で生活するのは最近になってからなのでまだわかんない事だけです。部活は陸上部に入ろうと思っています。よろしく願います。」

ちよつと堅かったかな。まあ死神にはいい挨拶って感じたな。それにしても陸上部に入るって？そんなことは俺には言いもしなかった。みんながこの転校生に注目している。たぶんこいつの頭のせいだな。自己紹介が終わると先生が話した。

「みんな上原に親切にしてあげろよな。今日からこのクラスの一員なんだから。それとわからないことがあつたら学級委員長の池上に聞くといいぞ。あいつだったら親切に教えてくれるからな。陸上部の一員でもあるし。」先生がそう言うのとヘルノスがこつちを向いてきた。みんなからも視線を注がれてなんだか居辛い気分だった。

一時間目は英語だった。俺は授業中にヘルノスのことを気にしていた。黒板に書かれることをひたすらノートに写している。あいつも鉛筆は使えるみたいだな。英語の授業は本当に眠くなる。先生が言っていることが外国語どころか、宇宙人が喋っているみたいに聞こえてくる。俺は死神と会話はしているのだけだな。今度は川崎を見てみる。あいつは真面目だからちゃんとノートを写しているみたいだな。俺はいつもノートをとらないから、ノート提出が近くなったり試験が近くなるといつも川崎のノートを借りている。こんなに不真面目そうな俺がどうして学級委員なんかやっているのかというと正直俺にもわからない。ただクラスで何か考えたり作業をするときになると誰もやろうとしないので仕方なく俺がやっていると先生が俺を「真面目に仕事ができる人」だと勘違いしているらしく、俺に学級委員を任せているようだ。でもこういうのってやっぱり真面目なうちにはいるのかな。

そんなことを考えているうちに一時間目は終わった。ヘルノスも特に変わった事をしていたようには見えない。ただノートをとる量が黒板に書かれていることよりも多かったような気がして他に何を書いていたのかとヘルノスに聞いてみた。

「授業中は暇だからな。黒板に書かれたことはすぐに書き写して教室に呪文を掛けていた。また保護の呪文とかをな。」

まったくそんなことをしていたのか。それにしてもなんで保護の呪文なんてものを掛けるんだろう。そんなに危険なものでも来るのだろうか。そんな事をするくらいなら、お前のその頭をどうにかしろと言いたくなる。他のクラスからまで注目されてるじゃないか。

二時間目は体育。授業はサッカーだった。ヘルノスと運動をするのは初めてだ。どんな身体能力を持っているのだろうか。見たところまだドリブル練習やシュート練習では普通に振舞っているようだ。死神ならもつとすばやく動けたり人間では考えられないような動きもできそうな気がすんだが。授業の途中でヘルノスに聞いて見た。

「意外と動きは普通だな。本気でやるとやっぱりまずいのか。」そういうとヘルノスは少し顔を赤らめていった。

「そうじゃない。人間の体にいるとある程度の身体能力しか発揮できないんだ。しようと思えば少しくらいは空を飛んだり瞬間的に移動することもできるんだけどな。」

なんだ。そうだったのか。俺がこいつに始めてあったときもあいつは電柱の上から瞬間移動のようなものをして俺も目の前に急に表れていたりしたな。これもつい一昨日のことなのだがもう遠い過去のように思えて来る。まだ、死神と生活を始めてから二日しか経っていないんだな……。そんなことを思っていると、ヘルノスが楽しそうに話しかけてきた。

「それより見てみる。俺を召喚できたお前なら見えるだろう。今結界が張られているんだ。もっと上を見てみる。」俺は上を見上げた。すると同時に驚いた。薄い緑色や青が混ざっているようなものが学校を覆うようにして空に広がっている。

「本当だ・・・これはすごいな。」

ヘルノスは満足そうにこう言った。

「人間界にいてもこれだけ呪文が使えるようになったんだな。俺様も1600年前に比べればずいぶん成長したもんだ。」

そう死神がいうと俺はこんな巨大な結界を張っても本当に大丈夫なのかと心配になったので聞いて見た。

「前は姿を知られるとまずいからそんな格好をしていると言っていたのにこんなに巨大な呪文を使っても平気なのか。」すると死神はすぐに答えてくれた。

「まず第一これが見えるものはまずいない。それに人間界でもしこれが見えるものがいたとしても自分の目を疑うだろう。それに誰かに言ったところで信じてもらえるはずはないしな。前にも言ったように、本気で今でも死神がいると信じているやつはいない。今はお前がいるけどな。」

なるほどそういうことか。確かに空に緑色の結界が見えるなんて言っても頭のいかれたやつだとしか思われないだろうな。

「それから俺様がどこにいてもお前を見つけられるように学校にいればどこにお前がいるかわかる呪文を掛けておいた。」

まったくこれでは監視でなくストーカーをされている気分だ。死神にされているのだからこれは文字通り憑かれているというものだけれど。二時間目の授業もこれで終わった。三、四時間目も普通の授業だった。ヘルノスは退屈そうでも授業に集中している様には見えなかった。でもこいつの性格だからな。どうみても真面目タイプには見えない。そんなぬるい感じで午前中も終わり、昼食の時間になった。

今日の給食はカレーとパンとサラダが出てきた。カレーは俺は結構好きでおかわりに何度も行った。ヘルノスもカレーを食べるのだが、野菜には一切手を付けようとしない。カレーに入っている人参やジャガイモにも手を付けていない。

「野菜はだめだ。なんだか体が受け付けられないものでな・・・」

一応こいつも今は人間の体にいる。栄養を取らないといけないなら食わないとだめだろ。なので野菜を食わないヘルノスに俺たちは無理やり口に入れようとした。周りの人たちも笑っている。ヘルノスもやめるといいながらも楽しそうだった。

昼食が終わるとヘルノスが話しかけてきた。

「今朝HRでお前が学級委員をやっていると聞いたが、なんでお前のようなやつが学級委員なんぞをやっているんだ。」

この質問に俺は動揺した。俺はたぶん先生から見ればクラスの仕事をよくやってくれる真面目な生徒と思われる。でもヘルノスは俺のことを他人と干渉したがない暗いやつだと思っっているはずだ。だからきつとヘルノスは俺が人のために働く学級委員をやっているのが不思議なのだろう。

いや、それよりも俺自身が不思議に感じているのかもしれない。

俺は別にクラスのためにとかそういうことは考えていない。ただ、誰も何もやろうとしない、何もはじまろうとしない、そんな空気が嫌いだからやっているだけだ。俺は真面目な性格じゃないし、人のために働くのも人と話すことも得意じゃないんだ。ただこれまでしてきたことが経験として俺に身についている、自分よりも人のために何かをするという術は持っていると思う。だから俺は素直にヘルノスに言った。

「なんで俺が学級委員をやっているのか・・・。それは俺自身が知りたいことなんだよ。俺は人のために何かをするということの経験はあるが、別にそこまで好きなことじゃないんだ。」

「好きじゃないならなぜやることがある？やりたければやってやりたくないならやらなければいいじゃないか。」

そう言われると言い返しようがない。俺は黙ったままずっといすに座っていた。

しばらくすると廊下に海山先輩が現れた。俺が部活をサボらない

ようにこうして待ち伏せをしているみたいだ。この前の土曜日もヘルノスといういろあつてサボっちゃったし……。まったく本当に面倒だ。

「おい、池上。お前土曜日の練習こなかっただろ。この前あれほど説教してやったというのに、いったい何があつたんだ。」

「えっと……。従兄弟が金曜に家に来て土曜はそいつを町に案内してたんです。」

「そうだったか。でもちゃんと報告しなきゃだめだぞ。川崎もいるんだから友達通じてでも連絡をよこすようにするんだぞ。それからもちろん今日の練習にも参加するようにな。」

俺は無言でうなずいた。そんな俺を見て先輩はため息をつき、教室の中を覗き込んできた。そしてヘルノスを見つけるとまた口を開いた。

「あいつが転校生の上原か。陸上部にはいると聞いていたぞ。お前の従兄弟なんだってな。それにしても……。体が細身で筋肉が少なそうだなあ。まあ、あいつも鍛えればお前のように細身で足の筋肉が強いスプリンターになれるかもしれないな。」

俺はそれを聞くと、それならヘルノスも俺と同じ種目を走るのかと思った。それは別に構わないのだけどなんだかやっぱり……。

「それじゃあ俺も教室に戻るとするか。今日の部活は上原ちゃんと見学に連れて来るんだぞ。」

そう言う先輩は歩いて行った。

俺も教室に戻って川崎と話をした。川崎と話をするのは楽しい。こいつと話すのはヘルノスと話すのと違って楽でいい。何にも考えなくても楽しくやれる。こういうやつは川崎しかない。

五、六時間目が終わると部活の時間になった。俺は川崎とヘルノスを誘って一緒に部室まで行くことにした。ヘルノスが持ってきているのは母さんが持たせたジャージとタオルと水筒だ。

「部活か。お前らはつまらん授業の後に帰りもせず部活なんかに出ているんだな。めんどくさくてやめたりしないのか。」

まずい、川崎に聞こえてしまっただろうか。ヘルノスの愚痴の対象は俺なのに川崎に聞こえていたらどうしよう……。ところが川崎はそんなことを気にしていないように言った。

「ははは。そりゃあ練習はきついし毎日あるから辛くなるときもあるよ。でもそれを乗り越えて大会でいい成績をとれたときは嬉しいんだ。それは努力した人にしかわからない喜びだし、それがあるか俺は部活を続けられるんだ。まあ俺は大会で大した成績を残せたわけじゃないけどね。自己ベストを更新できたときとかが嬉しいかな。」

やっぱり川崎らしいな。ヘルノスなんて先輩にこんなことを聞かれたら部活にはいる前に追い出されてしまう気がする。

「そう言うものなのか。それなら俺も続けるようにがんばってみよう。」

ヘルノスも少しやる気を見せた。

着替えを済まして準備体操をすると海山先輩が俺とヘルノスのところによって来た。

「君が上原君だね。陸上部は始めてかい。池上が練習をサボらないようにお前からも言ったやつてくれよ。」と先輩は笑いながら言うて俺を見てきた。

すると驚く事にヘルノスは硬い表情で、

「そんなこと自分で言えればいいじゃないですか。」と言った。ヘルノスがこんなことをいうとは思わなかったのでちよつと嬉しかった。先輩はこの言い方が気に入らなかつたようで表情を一変し、怒って練習に行ってしまった。俺はこれが愉快でたまらなかつた。そして小声でヘルノスに言った。

「ヘルノス、サンキュウな。先輩にあんなこと言えるなんてお前はすごいぞ。」

するとヘルノスはお前は何を言っているんだ？と言いたそうな表情で、

「俺は別に何もしていない。ただ本当のことを言っただけだ。」と

言った。

ヘルノスのことはわからないことがありすぎる。この数日間、普通に会話して、普通に生活をともししていたが、こいつは死神で俺は人間なんだ。それに俺はこいつに監視されていると言う。違うもの同士なのだからわからないことがあるのは当たり前だ。特に人間と死神といったおかしな組み合わせならなおさらだ。そんなことを思いながら練習に参加した。

練習はそれほどきついものではなかった。ヘルノスも練習には全然余裕という表情だったし、先生や先輩から注意されたことはすぐに直すことができる。むむむ・・・このままだと本当にヘルノスに負けてしまうかもしれない。俺も練習はサボらないようにしないと。部活が終わってヘルノスと二人で帰った。川崎は塾があるからと先に帰ってしまった。俺も本当は今日あるのだがサボってしまった。帰り道にヘルノスはおもむろに俺に話しかけてきた。

「川崎とは気が合うみたいだな。お前はどんな人となら気があうんだ。」

突拍子もない質問に俺は目を丸くした。川崎はいいやつだな。なにせ俺にとって特別な存在だし・・・。

「やつぱり・・・自分と違う人かな。川崎はよく喋るし、明るいやつだから。」

「人間なんてみんな違うだろう。少なくとも死神はそうだと思うが。それならお前はどんなやつでも好きということか。」

「そうじゃなくてだなあ・・・。なんていうか個性のある人ってことかな。その人にしかない性格とかがはっきりと表れている人が気があう人かも知れない。」

「個性は誰にでもある。お前が言うように川崎にははっきりと現れている個性があるがな。でもはっきりしないやつらだからこそ面白いところがあつたりするもんだ。そこが見つけられれば、きっと嫌いなやつなんていなくなる。そうは思わないか。」

またも俺は何も答えられない。こいつの言葉にはいつも混乱させら

れてしまう。まあ時間はあるし少しずつでも考えるようにしよう。それにしてもヘルノスと会ってから考えることが増えたような気がする。前から一人で何かを考えるといたくさんあったのだけれども、どれもマイナスのことばかりだった。今はどちらかと言うとプラスのことを考えている方が多い。そうだ、久しぶりに宝物のノートに今思っていることを書いてみよう。

家に帰ると母さんがお帰りといってきた。俺はただいまと返して自分の部屋に入り、鍵を掛けた。これで誰も入ってこないだろう。たんすの鍵を開けてノートを取り出す。そして今思っていることを書く。

学級委員をやっている理由・・・今日のヘルノスの先輩に対する態度・・・人の個性・・・

書くことは山積みになっていた。ヘルノスが来てからはまだこのノートを開いてなかったからな。ひたすらノートを書き続けた。他のものは一切気にならない。俺はこの部屋に一人。誰にも見られないこの空間は結構気に入っている。自分の思っていることって、ただ思っただけじゃなく言葉にして書いてみることでそのことをもっと理解できるし、新たな発見にも繋がる。言葉ってたぶんそういうことのためにあるんだな。言葉がなければ自分の言いたいことが自分でも理解できないだろう。書いてる途中にこういうことを考えるときがあるのもそのことももちろんこのノートに書く。だからいくらでも書ける。

一時間くらい経っただろうか。俺はまだノートを書いていた。ふとペンが止まり、考えていると声が聞こえた。

「さつきから何をやっている。」

「わあっ！」と俺は驚き、ノートを腕で抱えて隠した。

「家に帰ってからというものの、親とろくに会話もせず部屋にこもりきるなどそこまで大切な用事か。」

「別にそんなんじゃないよ。ただ見られなくなっただけで・・・。それより鍵をかけているんだから入ってくるなよ！」

「お前がそんなに怪しい態度を取るのがいけないんだ。それに俺はお前の監視役なんだから見るなといわれても困る。それで・・・そのノートはいつたいたいなんなんだ。さつきから何か書いていたが。」

俺はこのノートのことをヘルノスに話そうか迷った。今まで親にも川崎にもこのノートのことは言ったことがなかった。でもやっぱり教えることにした。ヘルノスには隠すようなことでもないかもな。

「これは俺の宝物のノートで中学に入ってから自分の思ったことを書いているんだ。具体的には人に言えないようなことかな。自分の中で考えるよりも何かに書いた方がいいと思って・・・。」

俺は言葉に詰まったしまった。普通こんなことをいったら馬鹿にされたり笑われたりする。なんでそんなことしてんの、とかそう思われてしまう。でもヘルノスは・・・。

「そのノート見せてみる。」

そのときのヘルノスの声は少し優しそうでいつもの不気味さを感じさせなかった。俺は素直にノートを渡した。

「ふむ・・・。書きなぐっているな。いつもの字とは違う、何かを伝えたいという気持ちを感じる。でもそんなことよりも内容がすごいな。【こんなつまらない世界で俺は何をしているのだろう】、【生きなければいけない理由はないのに生きたいと思う理由はなんだろ?】、【この世で信じていいのは自分だけ。他には何もない。】、【自分は生きている。理由もなく生きている。このままでいいのか】」

俺のノートに書いてあることの一部を読みあげるとヘルノスは溜め息をついた。

「自分の生きる意味とかそういうことを考えているんだな。そういうことをここまで深く考えるやつは数少ない。だがこんなことを考えるのも今の人間には大切かもしれない。今の人間は死について考えることが少なすぎる。死を理解しなければ本当の生を理解するこ

とができない。」

「じゃあ俺にも生きる意味を教えてくださいよ。俺だって目標とかそういうことは考えているつもりだけど……。やっぱり目先のことだけだと思っただ。もっと先、人間の行く末、死について。どうやってわかるんだ。」

ヘルノスは俺を睨みつけた。

「そんなことを聞くんじゃない。それは自分で答えを見つける。見つかるまでどこまでも追い求め続ける。まずは死について理解して次に生について考えるんだ。それは自分で見つけなければ意味がないし、他人が見つけれられることでもない。」

俺はその言葉を噛み締めた。でも……。やっぱりわからない。生きる意味とかはよく考えることだけどまだその答えは見つからない。ただなんとなく生きている。理由もなく。理由はきつとあるのだと思うだから今俺は生きているんだ。その理由を見つければいいことなのか……。

時間はどんどん過ぎていく。夕飯ものどを通らず、自分の部屋でベットのの上に仰向けになり、天井を眺めていた。しばらくするとヘルノスが部屋に入ってきた。お菓子の袋を持って。

「隼人、面白いことを考えた。」

「面白いことつてそのお菓子で何するつもりだよ。それより夕飯食ったのにまだ食べるのかお前は。」

ヘルノスは少し顔を赤らめてまた喋り始めた。

「お菓子のことじゃない。それに甘いもののお食べないと頭も体も働かないからな。お前ももっと食べた方がいいぞ。」

俺は少し呆れてしまった。死神はみんなこうなのだろうか。

「それじゃあ、一体なんの用だよ。」

「いや、さっきのお前のノートのことなんだが……。これは俺が実際に試したことじゃないからどうなるかわからないんだが。前に話した【契り】について覚えているか。」

ああ、あの話か。たしか人間同士や物とや死神同志で結べるものだ

ったな。

「なんで今更そんなことを……。」

ヘルノスはニヤリとしている。まるで世紀の実験を始める教授かなんかのような目だ。

「前にも言ったように人間と死神は契りを結ぶことはできない。だが人間と物、死神と物は結ぶことができる。」

ヘルノスのいいたいことが俺にはまだ理解できなかった。俺がノートと【契り】を結ぶということか。

「つまり俺様が言いたいのはお前がこのノートと【契り】を結び、俺もこのノートに【契り】を結ぶ。そうするとこのノートを仲立ちとして俺様とお前にも【契り】ができるのではないか、ということだ。」

突然のヘルノスのひらめきに俺は度肝を抜かれた。人間と死神が【契り】を結ぶ。それは仲立ちであつてもつながりができるだろう。そんなことが本当にできるのだろうか。でも俺がヘルノスと【契り】を……。

「なんだかよくわからない。でもこれは面白そうなこともな。よし！じゃあやり方を教えてくれ。」

俺の意気込みにヘルノスも満足そうにする。本当にできるのだろうか。

「じゃあまずは俺が【契り】を結ぶからよく見て置け。」

俺はたんすを開き、ノートをヘルノスに渡した。いよいよ始まるぞ。「まずノートを開く。ノートの場合はやりやすいのだけど、まず絶対条件を言う。ノートに使う言語は必ず自分が最初に学んだ言葉を使うことだ。お前は俺様の言語は読めんが気にしなくてもいい。間違えた場合は消しゴムを使ってもいいがそれ以降必ず同じ消しゴムを使うこと。たまにそれで【契り】が切れる場合がある。次に書く内容だ。全部一気に説明するからちゃんと聞いて置け。」

「物との契りの結び方」

- 1・自分と神に誓う日付も書く
- 2・使い方を書く
- 3・契りを結ぶと記す
- 4・決まり文句を書く

「決まり文句ってなんだ。」と俺はヘルノスに尋ねた。

「日本語に訳すところだ【あなたが私を信じている限り、私もあなたを信じ続けます。それは死後もけっして離れることはない、永遠のつながりです。】一語一句間違えるなよ。」

そういうとヘルノスは俺にノートを渡した。もうすでにノートに何か書かれている。死神の言葉のようだから俺には読めないけど。

ヘルノスに言われたことを全部書き終えて、俺は顔を上げた。

「全部書き終えたようだな。これで【契り】が結ばれたはずだ。」

「何も変わったところはない気がするけど・・・。」

といって俺はノートを逆さにしたりぺらぺらめくったりした。特に変化はない。

「そうすぐに変化が現れるわけではない。でもすでに目では見えないつながりができているはずだ。」

そういうと時報がなった。もう12時になった。

「今日も遅くまで起きすぎたな。もう寝てしまおう。変化はまだ現れないだろうし。」

ヘルノスは部屋を出て行ってしまったが俺は何もいわずにその背中を見ていた。しばらくすると俺もベットにはいり、電気を消した。

今日結んだ【契り】は一体どうなるのだろう。俺は本当にヘルノスともつながりができたんだろうか。わからないことが俺にのしかかってくる、疲れの溜まっていた俺はすぐに眠りについた。

第五章：学校（後書き）

ほとんど更新していませんでした。お待たせしてすみません。今回の話は今後のストーリーに深くかわってくるので、ぜひ覚えておいてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1347f/>

死神のヘルノス

2010年11月14日09時41分発行